

教育実践報告

『総合的な学習の時間の指導法』における 探究と評価の実践

大山光晴

1. はじめに

「総合的な学習の時間」は1998年（平成10年）の学習指導要領の改訂から導入された比較的新しい教科であるが、学校現場の指導に様々な課題があることが各方面から指摘されてきた。中央教育審議会教育課程部会生活・総合的な学習の時間ワーキンググループ（2015）からは、「一部の学校（特に中学校・高等学校）においては、ねらいや育てたい力が不明確で、児童生徒自身が、何のために活動を行い、何を学んだか自覚できていない。補充学習のような教育が行われたり、運動会の準備など学校行事と混同された実践が行われたりしている。」と指摘されている。また、中央教育審議会の答申（文部科学省、2016）には、「総合的な学習の時間を通してどのような資質・能力を育成するのかということや、総合的な学習の時間と各教科等との関連を明らかにするという点については学校により差がある。」との指摘がある。このような実態から、2015年12月の中央教育審議会答申の教職課程の改革案において科目区分の大幅な変更がなされ、教育職員免許法及び同法施行規則改正の2019年4月1日の施行に伴い、2019年度入学生から教員養成課程における必修科目として「総合的な学習の時間の指導法（以下、指導法と言う）」が新規に設定されることとなった。

教員養成課程を持つ各大学で始まった指導法の授業実践については、すでに多くの報告がある。金子・日高（2019）は、学生がグループで総合学習の年間指導計画と説明資料のスライドを作成して発表し、相互評価する取り組みを行っている。さらに、藤本・神（2020）らは、中学校と高等学校の授業実践例を提示して思考スキルの活用を行う授業を設計し、その効果を報告している。市川（2020）は、指導者として授業をデザインすることやカリキュラムを作ることについての課題を指摘している。教員の研修を担当している各都道府県の教育センターにおいても、吉田・栗田（2020）らが各学校における総合学習の指導体制の構築について調査研究し、その成果を報告している。このように各大学等で様々な取り組みが始まっているが、本学では、2018年度から筆者が指導法の授業を担当して、2021年度からは第3学年の必修科目として開講している。

また、2020年度に小学校から順次導入が始まっている新学習指導要領では、児童生徒に育成する資質・能力として、「探究」（小学校では「追究」）が重要なキーワードとなっている。特に高等学校の改訂では、「古典探究」や「地理探究」など、多くの教科名に「探究」の2文字が加わっており、「総合的な学習の時間」は「総合的な探究の時間」となった。（以下、この2つを総合学習と言う）各学校種の総合学習の学習指導要領解説には、全て右図1の「探究的な学習における児童（生徒）の学習の姿」が示されている。

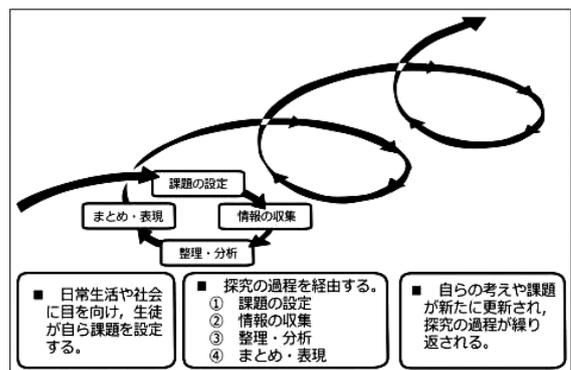


図1 探究的な学習における児童生徒の学習の姿

そして、今回の学習指導要領の改訂では「評価」も重要な変更があった。学習評価がこれまでの4観点から、3観点（知識・技能、思考力・判断力・表現力、学びに向かう力・人間性等）になったことに加えて、高等学校にも観点別評価が導入されたのである。国立教育政策研究所では、この新たな評価に合わせて「学習評価のあり方ハンドブック（2019）」を作成し、2020年と2021年には各学校種、各教科別の参考資料「指導と評価の一体化のための学習評価に関する参考資料」をまとめている。新学習指導要領の下で教師となる教職課程の学生にとって、資質・能力の育成を図る探究の手法と新たな評価方法を学ぶことは喫緊の課題である。総合学習の活動では児童生徒を数値で評定することはないが、観点は他の教科と同様である。児童生徒の探究的な活動を、ポートフォリオ評価やパフォーマンス評価を活用して観点別に評価することによって、子供たちの学習意欲を高め、他の教科の学習にも良い影響を及ぼすことが期待される。

このような新学習指導要領の改訂内容を踏まえ、本学の指導法の授業では、開講当初から探究的な学びと評価活動の実践を重視したカリキュラムを構築しており、その成果と課題を報告する。

2. 指導法のカリキュラムにおける探究と評価の位置付け

秀明大学における指導法の授業では、学生が過去に受けてきた総合学習の授業の内容を第1回の授業で調査している。小学校では稲作や塩作り、中学校では職場体験などの記述があるが、学校段階が進むほど記述量が減り、高等学校の内容には「記憶がありません」「席替え」「自習」という言葉が多く書かれ、前述した総合学習の指導の課題に関する指摘を裏付ける結果となっていた。

また、多くの学生は評価を総合的な評価や評定としてのみ捉えており、パフォーマンス評価やポートフォリオ評価の言葉を知っていても、ルーブリックを作成した経験のある学生は2021年度は一人もいなかった。

このような学生達が、教師として総合学習の指導と評価ができるようになるためには、「探究」という学びを学生が自ら体験することが最も重要であると考えられる。そこで、筆者の探究の指導に関する経験（大山2018,2020など）を生かして、探究活動に関する演習を主体としたカリキュラムを構築することとした。

筆者が本学に着任する前に勤務した中学校と高等学校では、自分でテーマを設定させて行う課題研究を生徒全員に課していた。中学校では、カリキュラムの作成時にも関わり、総合学習をアカデミアと呼んで学校の特色とし全教員で総合学習の時間にゼミを開講していた。また高等学校でも、課題研究の学びを普通科の生徒全員へ広げるために、1年次に13のゼミを開講し、総合学習のための生徒用テキスト（長高メソッド2015-）を

表1 秀明大学における総合的な学習の時間の指導論のカリキュラム（2021年度前期）

回	探究活動の位置付け	授業の活動内容
1	総学の意義と課題	学生の総合学習の経験に関するアンケート調査及び学習指導要領の理解と総合学習の課題に関する協議
2	課題の設定	「地域と食」に関する小・中学校の各学年の活動テーマと活動内容の設定及び年間指導計画作成
3	課題の設定	学生の地元の小・中学校で行う総合学習のテーマと活動内容の設定及び過去の学生が設定したテーマに関する協議
4	課題の設定	「SDGs」に関する中学校・高等学校のテーマ設定と活動計画の立案及び「考えるための技法」に関する演習
5	課題の設定	遺伝子組み換え作物とmRNAワクチンに関する理解を深めるための方策に関する協議とテーマ設定に関する演習
6	情報の収集	「ダイバーシティ」をテーマとした調査活動に関するアンケートを作成する演習とこの内容に関するグループ協議
7	情報の収集	Web上の政府統計（e-Stat）の資料（社会生活基本調査）を活用する演習（この資料を活用する方法を考える）
8	整理・分析	「シルバーシートの利用」に関する高校生のアンケート結果を、エクセルとパワーポイントを活用してまとめる演習
9	整理・分析	統計処理の方法（分散、相関係数、など）に関する演習（エクセル関数で与えられたデータの相関係数を求める）
10	整理・分析	学生のワークシートの記述と各自のレポートの文章を、テキストマイニングのソフト（kh-coder）で分析する演習
11	活動の評価	評価のためのルーブリック作り(1)：小・中学生の活動で使う場合のルーブリックを各自で作成し、全体でまとめる活動
12	活動の評価	評価のためのルーブリック作り(2)：学生が行う発表で使うルーブリックを各自で作成し、全体でまとめる活動
13	まとめ・表現	発表と評価の活動の実践(1)：パワーポイントによる発表（一人8分＋質疑2分程度）をルーブリックで相互評価する
14	まとめ・表現	発表と評価の活動の実践(2)：パワーポイントによる発表（一人8分＋質疑2分程度）をルーブリックで相互評価する
15	授業の振り返り	発表の評価結果に関する協議及び授業のまとめと振り返り、指導論の授業に関する質問紙調査

作成して探究活動を行っていた。このテキストに載っている「課題の設定」や「情報収集の方法」の場面での課題（「マインドマップの描画」など）を、授業中に学生に与える課題の参考とした。

秀明大学の指導法の授業は表1の通り、探究の4つのプロセス（課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現）に対応した演習に加えて、総合学習における児童生徒の活動を評価するためのパフォーマンス評価の活動（ループリック作りと相互評価）を講座の柱としている。そして、学生には授業で学んだことを踏まえて、各自で自由にテーマを設定して探究活動を行う課題を与えている。今回報告する指導論の授業では毎回ワークシートを配布していたが、学生が個別に取り組む探究活動の進捗状況は、このワークシートに書き込ませて確認を行っていた。2020年と2021年は新型コロナウイルスの感染拡大を受けて、指導論の授業はオンラインが中心となったが、このカリキュラムに大きな変更を加えてはいなかった。

3. 学生が行った探究活動の結果（2021年度前期）

受講学生数はクラス1が68人、クラス2が79人で合計147人であり、以下の項目への回答者数は139人である。(1)(2)の項目の調査は、学生の調査活動の実態を把握するために最後の授業で行ったものである。

(1) 学生の調査方法は次の①②③の3通りであり、複数の方法を活用した学生がいる。

① Web上の情報を調査した学生：29人

② アンケートを作成して調査した学生

・配布方法：1.紙の配布：6人、2.LINE：24人、3.Instagram：33人

4.Googleフォーム：86人、5.Twitter：3人、6.インタビュー：10人

・調査人数：平均46人（最大は300人）

③ 本・雑誌・論文などに書かれたものを調査した学生：6人

(2) パワーポイントの発表用資料を作った経験は、1回が8人、10回以上が48人であった。

(3) 学生が行った探究活動のテーマの例を、①～⑥の6つの分野に分けて示す。

① 教育関連のテーマ

読書がもたらす効果～PISAの読解力結果と読書～ 漫画は読書になり得るのか 子ども性格分析
 心理学から実践へ HSPの割合とその度合い 学校行事に関するアンケート ICT機器と
 ICT教育に関するアンケート調査 公立高校と私立高校の校則の違いと地毛証明書 校則のイメ
 ージと在り方に関する考察 イメージマップを用いて教育の教科横断の達成具合を調査する リ
 モート講義の満足度について モンテッソーリ教育 宇宙分野に関するアンケート 授業中に
 寝ない方法 選挙と政治的関心

② SDGs関連のテーマ

私たちにできる「貧困をなくそう」 フードロスに関する調査 SDGsの目標14『海の豊かさを守ろう』
 におけるプラスチック問題 LGBTQに対するイメージ ごみの排出量とお店の関係
 ビニール有料化による環境問題への効果

③ 健康・食に関するテーマ

甘いものと健康 健康に対する意識調査 ヨガは健康にいいのか 疲労回復についての調査
 睡眠の質 画面を見る時間と日常生活 食生活の乱れがどのような時に起きてしまっているのか
 を知る 食事と集中力 伝統食・伝統野菜についての考察 野菜の好き嫌いについて 牛乳
 と身長には関係はあるのか? カフェインについて 餃子につけるタレ アイスクリームに関す

る調査 きのこの山とたけのこの里の好み

④ ゲーム関連のテーマ

スマホゲームに課金したことがありますか？ ゲームをすると頭が良くなるのか？ 動画配信サービスについてコロナ流行がもたらした影響 地方ごとに選ばれるポケモン御三家の割合 ゲーム所持と視力の関係 「APP STORE 年間ダウンロード数」からみるニーズの変化と私たちの生活

⑤ 地域（地元）関連のテーマ

埼玉県民満足度調査 栃木県の魅力はどこ？ 世界遺産登録を目指す佐渡金山について 山形県について 大阪といえば 沖縄県の印象

⑥ その他（学生生活に関連するテーマ）

一人旅のすゝめ 人の印象は何で決まるか 利き手について イヌ派かネコ派かについての調査猫の引き取りについて Disney を貸し切るには?? 一人称についてのアンケート調査結果 美と黄金比 人に好まれる顔～縦横比から～ 男女の髪の価値観 行列に関するアンケート 相性って本当?! 趣味について 隙間時間に何してる? あなたの夢調査 Tシャツへの価値観 職業について 血液型について 勉強と音楽について 植物が人間に及ぼす影響

4. 学生が行った評価活動の概要（2019 年度前期、2021 年度前期）

(1) 学生が作成したループリックと評価結果

学生が行った評価活動の結果として、ここでは、選択科目授業であり通常の対面授業が行われていた 2019

表2 2019 年度前期の学生が作ったループリック

評価の観点	段階A	段階B	段階C
テーマについての調べ方	さまざまな方法でテーマに沿った適切な情報を得ている	適切な情報を得ている	情報を得ただけで、内容が不十分
得られた情報のまとめ方（結果の考察）	結果をもとにした考察を深めて、次の課題を見出している	結果をもとに考察している	結果をまとめただけである
発表の仕方	資料を基に図や表、グラフなどを活用して、話し方を含めて、聞き手が内容を理解しやすいと思うような工夫を数多くしている	聞き手にわかりやすく内容を説明している	内容について話をしているだけで、伝えようという気持ちがあまり感じられない

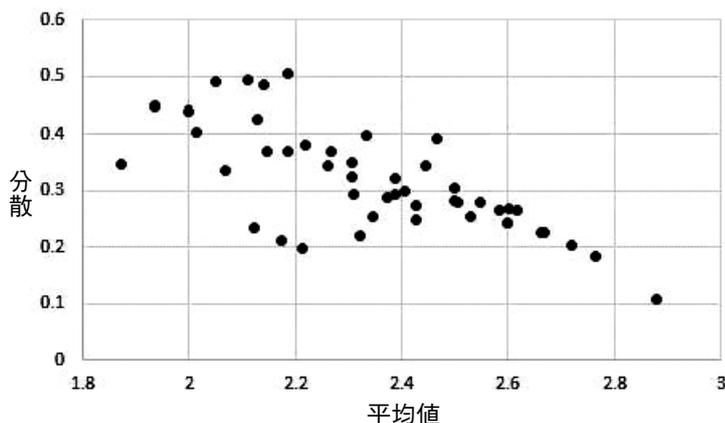


図2 2019 年度前期 評価の平均値と分散（評価者の人数＝47 人）
評定値全体の平均：2.35、評定値の分散の平均 0.315

年度前期のルーブリック（表2）と、必修科目となり発表と評価をオンラインで行った2021年度前期クラス1の学生が作成したルーブリック（表3）、及びそれぞれの評価結果の平均値と分散のグラフ（図2、図3）を示す。（2021年度前期クラス2の学生のルーブリックは、次の（2）の中で示す）。

これらのルーブリックは、まず個人で作成し、数人のグループで協議して作成してから全体に発表し、最も評価が高かったグループのルーブリックを発表活動で用いた。そして、平均値と分散の図は、分散などを第9回の授業で扱っていることと、学生評価全体の傾向を理解させるために作成して提示したものである。

図2と図3の横軸は、学生が行った評価結果について、段階Aを3点、段階Bを2点、段階Cを1点と換算して点数化し、その平均値（観点別の平均を求め、さらに3つの観点の平均を計算）を取った値である。図の縦軸は、一人の学生が行った評価がどのくらいばらついてきたかを示す「分散」である。図中の●の一つ一つが、評価を行なった学生を表している。

学生の評価の平均値 $\langle x \rangle$ は、その学生が評価する対象となった全員の3つの観点をAと評価した場合は $\langle x \rangle = 3$ であり、分散は0となる。このような評価をする学生が毎年の授業で複数名いるが、学生の評価にBやCの段階が加わると、 $\langle x \rangle$ の値が小さくなると共に、値がばらつくために分散は大きくなる。

仮に、学生の評価のばらつきが、段階Bの数が1つ、2つ、3つと増えていく場合を考えると、分散を求める式は $s^2 = \langle x^2 \rangle - \langle x \rangle^2$ であるから（ s が標準偏差、 s^2 が分散）、評価対象の人数を n 、 B という評価を付けた数を a とすると、 $\langle x \rangle = \frac{(9n-a)}{3n}$ となり、 $s^2 = -\frac{1}{9} \cdot \left(\frac{a}{n} - \frac{3}{2}\right)^2 + \frac{1}{4}$ と表わすことができる。 $\langle x \rangle$ で表すと、 $s^2 = -3 \cdot (2.5 - \langle x \rangle)^2 + \frac{1}{4}$ となる。

したがって、評価結果の図は $\langle x \rangle = 2.5$ のときに、 $s^2 = \frac{1}{4} = 0.25$ という最大値を取る上に凸の二次関数で表されることがわかる。

表3 2021年度前期クラス1の学生が作ったルーブリック

観点	段階A	段階B	段階C
調査結果を基に、具体的な数値や根拠を示しながら発表している	調査の結果を十分信頼性のある具体的な数値や根拠を基に発表している	調査の結果をある程度信頼性のある根拠を基に発表している	調査の結果を自分の言葉で発表している
幅広い分野の知識を基にして、課題に対して思考・判断を行うことができる	幅広い分野の知識をもとに、課題に対して十分な思考・判断を行うことができる	ある程度の知識をもとに課題に対して思考・判断を行うことができる	知識を基に、課題に対して判断を行うことができる
自分で決めた調査内容に積極的に取り組み、その成果をわかりやすく工夫して発表しようとしている	自分で決めた調査内容に意欲的に取り組み、その成果を聞き手に理解しやすいように書式や解説を工夫して発表している	自分で決めた調査内容に意欲的に取り組み、その成果を自分なりに工夫して発表している	自分で決めた調査内容に意欲的に取り組み、その成果を発表している

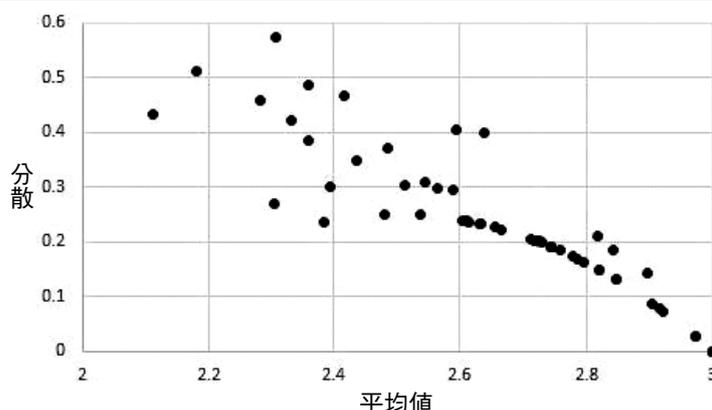


図3 2021年度前期クラス1 評価の平均値と分散（評価者の人数=69人）
 評定値全体の平均：2.69、評定値の分散の平均0.210

図2と図3の横軸（ x 軸）につながる右側の分布が、二次曲線の形になっているのはこのためであり、学生が行った評価がA又はBの場合、平均が2から3の間の二次曲線上にあり、AとBの数の割合で3または2に近づくこととなる。また、Cという評価が付くと分散値が大きくなり、CとAの数の割合で、平均値と分散の大きさが大きくなる場合と小さくなる場合に分かれる。発表者一人に評価者が12～13人であることから、C評価一つで分散がおよそ0.05～0.15程度大きくなる。

(2) 学生が考える評価の課題（2021年度前期）

第15回の授業では、各クラスが発表会で用いたルーブリックと相互評価の結果（各観点の評定平均値と分散など）を2クラス分示し、学生に評価活動の成果と課題について分析をさせた。クラス1とクラス2の授業内容と評価の方法（オンライン）はまったく同じであったが、クラス2が作成したルーブリックは表4に示すものであり、各段階を数字で換算した評定値全体の平均は2.64、評定値の分散の平均は0.209で、クラス1とほぼ同じ数値であった。それぞれのクラスの学生が、自分たちの評価結果の課題を分析した記述内容を、①評価が甘くなってしまった、②良い発表が多かった結果である、③評価の段階に課題があった、④分析ができていない回答の4つに分類して、それぞれの回答数と全体に対する割合を表5に示す。

表4 2021年度前期クラス2の学生が作ったルーブリック

観点	段階A	段階B	段階C
アンケートの題材と質問が適切かどうか	調べたい内容の回答が得られる質問を設定できている。また、選択式、記述式をうまく活用し、比較しやすいような質問に工夫している	ある程度ほしい答えが得られるような質問が設定できている	質問がわかりづらく、調べたい内容から逸れてしまっている
PowerPointのデザイン	ユニバーサルデザインを用いて万人に見やすい資料になっているか	配色などを工夫し、一般的に見やすい資料になっているか	情報が入り混じっており、見づらい資料になっている
発表の内容に一貫性がある。	調査内容についての説明が、導入からまとめへと導くために一貫されていて、内容が右往左往していない。	説明につながりがあり、所要所での内容のまとまりを感じることができる	集めた情報を基に、発表を作り上げている

表5 2021年度前期クラス1とクラス2の学生による評価分析の結果

回答内容の分類	クラス1		クラス2	
	回答数	割合	回答数	割合
①評価が甘くなってしまった	14	23.3%	7	9.9%
②良い発表が多かった結果である	11	18.3%	29	40.8%
③評価の段階に課題があった	27	45.0%	9	12.7%
④分析ができていない回答	8	13.3%	26	36.6%

学生の記述回答の例を2件、下に示す。

・「全体的にA評価の割合が高く、全員が良い発表をしたということが分かった。しかし、全体的にB評価以上がされており、評価が甘くなってしまっていたのではないかと思います。木曜クラス2の段階Cでは、否定的な言葉を含んでいるためC評価するのを躊躇してしまったのではないかと考えた。しかし、全体的にはB評価以上が多く、良い発表ができたのではないかと思います。」

・「今回の評価の観点は適切であるかどうかや、内容に一貫性を感じられるか等、個人の考えや価値観が入り込みやすい者が多かったためグラフにばらつきが多く、同じ平均値でも分散の度合いが異なっていたと考えられる。これが分かったことが成果であると考えます。また、課題点は評価基準が不明瞭で人によってどのラインでどの評価とするか異なってしまう、ばらつきがでてしまったことにあると思う。」

5. 考察

学生が行った探究活動のテーマは様々な分野に及んでおり、2018年度と2020年度のテーマも同じ傾向を示していた。授業で扱った教育や地域に関連するテーマとSDGs関連のテーマだけでなく、ゲームに関するテーマ、健康や趣味に関するテーマ、学生生活に関連するテーマの6分野は各年度に必ず存在しており、発表会の場でも学生は仲間から多様な情報を得ることができていた。

設定したテーマに関する具体的な情報を得る方法として、新型コロナウイルスのまん延以前は対面調査や紙媒体が多かったが、2021年前期では89.9%（125名/139名）の学生がSNS等を活用してアンケート調査を行い、毎回短期間の活動であるが、2021年度前期は平均で46名から回答を得ており、このデータを基に発表を行うことができていた。

2021年度の発表はすべてZoomミーティングのブレイクアウトルームで、パワーポイントを使って行われたが、学生の作成したファイルの完成度にはかなりばらつきがあった。ほとんどの学生が表やグラフなどは示すことができていたが、スライドの画面がデータと文字だけという発表も複数あり、スライドの作成経験の差と作成時間の不足が原因と考えられる。

このように、到達したレベルに差は生じているが、学生は本学の指導論のカリキュラムを受講することによって、探究の過程を経験して探究に関する一通りのスキルを身に付けることができたと考えている。

その一方で、評価活動については、図2、図3は学生の評価はAがたいへん多く、Bが少なく、ほとんどの学生がC評価をつけていないことがわかる。学生の発表内容が全て素晴らしいものであれば、全てA評価ということも考えられるが、提出された発表資料には完成度に明らかにばらつきがあったことから考えて、学生の評価がより高い段階にシフトしていることが推察される。

この原因として考えられることは2つある。1つは学生の評価の能力が不十分であったこと、もう1つは評価のために作成したルーブリックの完成度が低かったことである。これらの課題については、表5に示されているように、学生の記述回答にも明確に書かれており、多くの学生が評価の課題と難しさを知ることができたと考えている。

学生のルーブリックの記述内容について、表2、表3、表4の各観点と基準を比較すると、「適切な」や「ある程度」など曖昧な表現が多い。段階Aは表2の内容の方が表3よりも達成することが難しい内容であったことから、図2の分散が大きくなったと考えられる。また、図2では図中の●の位置から、A評価がほとんどの学生グループよりも、左側のBとCが入り混じった学生グループの方が多いたことが読み取れる。

学生が考える評価分析の課題について、表5でクラス1は半数近い45%の学生が評価規準の問題を指摘している。一方で、クラス2の約40%の学生は評価結果を②の発表が良かったためと考えており、次に割合が多い約37%の④の記述内容は、平均値や分散の数値を論じるだけの回答であった。数値に換算した評価の平均値と分散の平均値がほぼ同じであっても、クラスの違いによって評価分析の視点が異なる要因は、発表形式が同じオンラインなので、用いたルーブリックに依存していると推察できるが、④の記述内容は学生の専修（クラス1：国語専修・英語専修・保健体育専修・初等コース、クラス2：社会専修・理科専修・初等コース）や統計に関する学習履歴と関連があることも考えられ、今後さらに詳しく検討する必要がある。

パフォーマンス評価とルーブリックの活用については、本学に着任する以前から高校生の課題研究の評価のために、河合の取組（2003）や松下ら京都大学のグループの取組（2010）を参考にして実践を行ってきたが、総合学習の指導論に合わせた工夫が必要である。ルーブリックを作成すること、用いることが初めての学生がほとんどであったことを考えると、ルーブリックの内容や決め方と使い方について、授業での議論が不足して

いたことは否めない。ブレイクアウトルームと全体ミーティングの場面で、お互いの考えをすり合わせる方法に加えて、カリキュラム全体の時間配分についても検討が必要である。

2019年度の対面で実施した場合と2021年度のハイブリット（発表と評価はオンラインのみ）の場合とで、探究も評価も活動内容に大きな違いはないことから、授業の形態にかかわらず学生の取組みは良好であったといえる。

学生からの本授業についての意見として、エクセル操作や統計処理が難しかったこと、毎時間のワークシートの作業量が多すぎたことなどの指摘があった一方で、「今回この講義を受けて、資料の調べ方・まとめ方、工夫や重要事項などを知ることができました。今までなんとなく作っていたスライドやパワーポイント資料に対して、意識するポイントや児童に指導するときに気を付けたほうがいいことなども学ぶことができて、多くの知識が身についたと思います。」という意見もあり、カリキュラム全体の趣旨は一定程度、学生に伝えることができたと考えている。

6. おわりに

学生に探究の過程を体験させる本学の指導論のカリキュラムは、この3年半で目指す形が整いつつあり、学生の取組みも満足できるレベルに達していると考えられるが、評価の指導方法については、多くの課題が残っており、今後もこれまでの実践を踏まえて、さらに工夫・改善を行っていきたい。

教職課程で養成すべき教師に求める資質・能力のハードルは、常に新たな内容が追加されて高く引き上げられている。探究で身に付けることができる課題解決の能力は、総合学習が育成を目指す資質・能力であると共に、変化の激しい時代にあって、先を見通すことが難しい今の教育現場に立つ学生にとっては、教師として生き抜くために学生自身が身に付ける必要がある資質・能力である。この資質・能力の育成に、今後も鋭意努めていきたい。

[参考文献]

- ・市川洋子（2020）「教職科目『総合的な学習の時間の指導法』の試行による成果と課題」、敬愛大学国際研究、第33号、p.59-74
- ・大山光晴（2018）「生徒が問題を見いだして解決する授業を行うために必要な指導方法を考える」、理科の教育10月号、Vol.67、p.15-18
- ・大山光晴（2020）「探究的な学習に必要な指導方法を考える」スーパーサイエンスハイスクール令和元年度実施報告書 千葉県立長生高等学校
- ・金子研太・日高和美（2019）「『総合的な学習の時間』に関する指導方法の検討—教育方法論におけるカリキュラム・マネジメントの模擬実践を通じて—」、九共大紀要、第9巻、第2号
- ・河合 久（2003）「客観的な評価をめざすルーブリックの研究開発」国立教育政策研究所
- ・藤本義博・神孝幸（2020）「教職科目『総合的な学習の時間の指導法』の授業設計についての重点抽出に関する研究」岡山理科大学紀要 第56号B、p.83-93
- ・吉田早織・栗田泉（2020）「総合的な探究の時間に関する研究〔中間報告〕」神奈川県立総合教育センター研究集録39、p.9～18
- ・千葉県立長生高等学校（2015～2020）「長高メソッド」

- ・ 松下佳代編著（2010）「＜新しい能力＞が教育を変えるか」 ミネルヴァ書房
- ・ 国立教育政策研究所（2019）「学習評価のあり方ハンドブック」
- ・ 国立教育政策研究所（2020）「指導と評価の一体化のための学習評価に関する参考資料」小学校、中学校
- ・ 国立教育政策研究所（2020）「指導と評価の一体化のための学習評価に関する参考資料」高等学校
- ・ 中央教育審議会教育課程部会生活・総合的な学習の時間ワーキンググループ資料（2015）「総合的な学習の時間について」
- ・ 文部科学省（2016）「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」p.236
- ・ 文部科学省（2018）「中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 総合的な学習の時間編」
- ・ 文部科学省（2018）「高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）解説総合的な探究の時間編」

